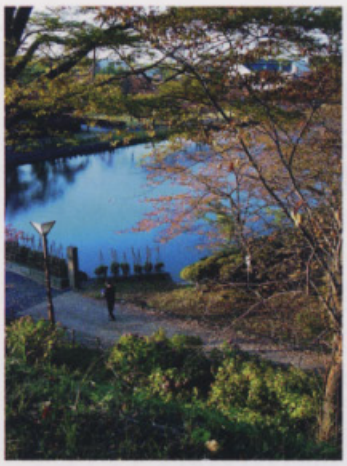
西城かわらばん

Merry X'mas!

発行　2009・12・15　第8号

医療法人高田西城会　高田西城病院
理事長・院長　川室 優
〒943-0834　上越市西城町2-8-30
Tel (025)523-2139/Fax 526-0102

Takada Nishishiro Hospital … News letter No.8　http://www.nishishiro-hp.or.jp/



まもなく、冬が訪れて
高田公園も雪化粧

創立記念日にあたり

理事長・院長　川室 優

高田西城病院・川室記念病院の庭先に花水木の赤い実が色づく季節を迎える中で本日、ここに両病院の創立記念式典を挙行するに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

第一に131年前、この越後の地、頸城平野において、病を患う人々に西洋医療の光を見出した先人 川室道一 に敬意を表したいと存じます。そして、ご臨席賜りました上越保健所長 西脇京子様始め、関係各位の皆様、また、日頃より、地域に医療福祉サービスを提供することを誇りとする職員の方々と共に、創立記念をお祝いいたしますことは、望外の慶びでございます。両病院は、上越地域の心の病を患う方々の為の、心の総合医療機関として、皆様から愛され信頼され、今日に至りました。この両病院が長きにわたり維持できましたことは、本当に多大なるご支援・ご協力の賜と心より感謝申し上げます。

21世紀の過ぎ行く日々の状況は、様々な事柄により、人間の心を傷つけ、時に、冷静な判断や認知が困難となり、更には、命を失う悲しい出来事が起こり得るような時代であります。そのような人と人の絆が薄らいでゆく希薄な社会の中で、私共は、両病院が、心の病の回復に役立つ治療機関であることを願い、前進するのみでございます。

両病院が今後も「心の健康を守り気軽に利用できる住民と共にある病院」をモットーとして、常に地域に貢献できる医療機関であることを願っております。

平成10年に『この道をてらす光とともに』を提示し、私は、職員と共に、この言葉の意義を共有いたしました。この道とは人の道であり、人に光を照らすことにより人に寿を与えること、すなわち仁寿をもたらすことでございます。

結びに、本日ご出席の皆様のご健勝をご祈念申し上げますと共に、今後も皆様並びに、和・道グループとして、上越老人福祉協会、上越つくしの里医療福祉協会、上越保健医療福祉専門学校の方々と「和を以て貴と為し」の志を共にしながら、質の高い心の治療病院づくりをしていきたいと思いますので、どうぞ末永くご支援賜りたくお願い申し上げ、式辞といたします。

（平成21年10月24日の創立記念式典における式辞に加筆いたしました。）

高田"こころ"の優しき通信 創刊！

編集委員　宮崎 眞也子（相談リハ部長 CP）

平成21年6月、患者様向けのニュースレターが創刊されました。現在、5名の編集委員が月1回の発行を目標に取り組んでいます。創刊にあたっては、院長先生の「患者様のこころに優しく届く、親しみやすい通信を」との願いを込めて『高田 "こころ" の優しき通信』と名付けられました。創刊号には院長先生の巻頭言を初め、湯浅先生の「記憶に関する連載」や川村先生の「たばこ外来紹介」、「外来担当医師からのメッセージ」など、ご多忙の中、各先生方から快く貴重な原稿をお寄せ頂いております。

また、関連セクションのご協力により、患者様への大切なお知らせ、季節に応じた心身の健康知識の紹介など、日常生活に役立つ身近な話題を盛り込み、患者様の安心感につながる内容を心がけてきました。この通信が、各先生を始め当院職員が患者様を見守る、優しくあたたかい「まなざし」を伝える存在となるように、皆様の力で育てて頂きたいと存じます。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

紹介

地域医療で認知症を支える仕組み

上越認知症地域連携パスのご案内

http://www.nishishiro-hp.or.jp/

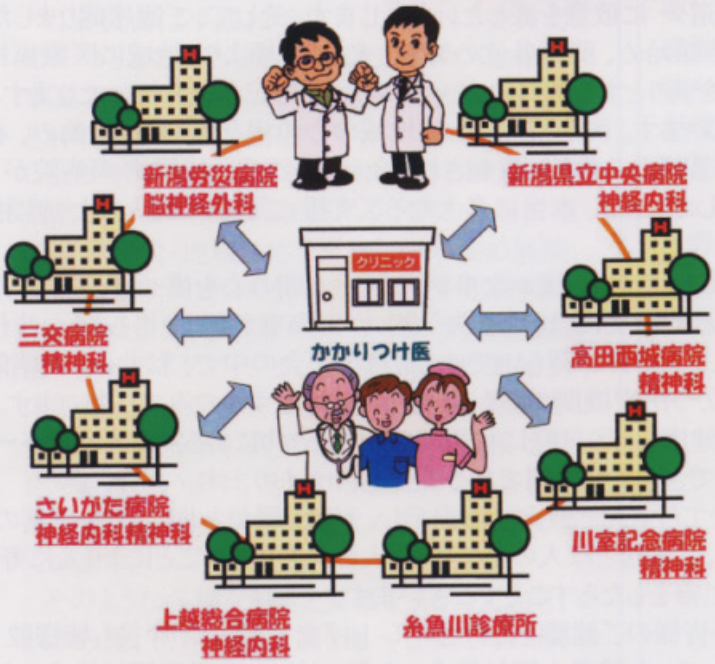
副院長　湯浅 悟

上越認知症地域連携パスのご案内

今回ご案内する「上越認知症地域連携パス」は患者様の診断方法や受診予定を患者様とご家族、かかりつけ医、病院で共有するためにつくりました認知症の治療計画です。

※「上越認知症地域連携パス」に関するお尋ねやご意見がございましたら、かかりつけ医までお願い致します。

上越認知症地域連携パス研究会



高齢化によりまして認知症患者は確実に増加し、厚労省の統計では、2005年の約205万人から30年後の2035年には2.2倍の445万人になる見通しで、実に65歳以上の高齢者の8人に1人が認知症になると予想されます。しかも核家族化は進み、独居や夫婦のみの世帯で認知症患者が増えると考えられています。

もはや、認知症は珍しい病気ではなく、高齢化に伴って誰にでもかかりうる疾患となりました。それは同時に、かかりつけ医の先生方がまずは第一に診断、治療をする時代になってきたと言えます。しかし、この疾患は、現在のところ原因が不明で軽度から重度までのいろいろな段階がある進行性の病です。そこで、かかりつけ医と専門医がいろいろな段階で、また症状の変化に際して、連携をはかっていくことが必要と思います。

この上越地域では平成21年7月から、開業医と認知症の専門医が話し合い、気軽に相談できるように『上越認知症地域連携パス』がスタートしました。専門機関は当院のほか、新潟県立中央病院、上越総合病院、新潟労災病院、川室記念病院、三交病院、さいがた病院、糸魚川診療所となっており、入院治療につきましても病診・病病連携のもと適切に対応できるようにしたいと思っています。

認知症になっても、地域に暮らしながら安心で充実した医療を受けられるね。

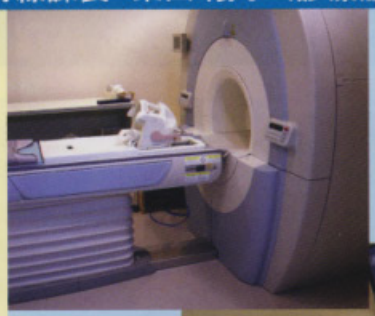
「連携パス」があると、かかりつけのDr.と専門のDr.が協力しやすくなるんだね。

新規設置！　MRIの設置と利用

診療放射線課長　柴山 陽子（診療放射線技師）

9月下旬よりMRI装置が稼動しています。体内の水素原子核に強力な磁場を与え、そこに電波を当てると、水素原子核は一斉に特定の方向を向きます。電波を切ると水素原子核は元の状態に戻ろうとします。このとき発生するごく微弱な電波（MR信号）を受信して、コンピュータ処理し画像化するのが MRI（Magnetic Resonance Imaging）です。原子核の戻り方は疾患などの状態により変化し、この違いを白黒の画像に表わします。こうした画像情報は認知症の診断にも活かされています。

当院では第1・第3土曜日にもの忘れ外来を行っていますが、MRI 画像を VSRAD という早期アルツハイマー診断支援システムで分析することによって、早期アルツハイマー型認知症を診断するための支援情報を提供することもできるようになりました。人体への侵襲性が非常に低い検査ですので、認知症の診断だけでなく様々な疾患の診断に役立てていただきたいと思います。



← MRI 本体

操作室 →

⇧ 主治医にご相談ください。

報告

第9回「はさ木フェスタ」

10月3日 いなほ園・川室記念病院エリアで開催

実行委員　大野 由喜江（Ns）

今回、第9回はさ木フェスタの実行委員に選ばれましたが、初めての参加で、実行委員として動けるか非常に心配でした。

3ヶ月前からつくし工房が中心となって各施設が集まり、ポスターやアトラクション、講演の内容を決めていき、前日には会場の設営を行います。テントを組み立てたり、椅子、テーブルを移動させたりと意外と重労働でした。

当日は好天に恵まれ、朝から多くの来場者を見ることができました。また会場のあちらこちらでスタッフや患者様、地域の方、子供たちの交流が垣間見られ、このフェスティバルは意義のあるものだと改めて感じました。

今、上越地域には医療スタッフが足りていないのが現状です。私は看護師仲間から『精神科で働いて怖くないのか、大変でないのか？』とよく聞かれます。やはり精神科といえば市民、医療関係者にとってもあまり良いイメージではないようです。

しかし、このような会をもっと地域の皆様にアピールし、より多くの来場者が精神疾患を持つ人と接することで、精神障害の古いイメージが変わり、精神科医療に携わりたいと思う方々が増えるかもしれません。今後も規模を拡大しつつ、第10回、50回と続いていってほしいと思います。

1

2

第9回 はさ木フェスタ風景

1 オープニングは雄志中学の太鼓

2 ちびっこ広場はおもちゃが色々

3 ステージに注目 観客のみなさん

4 テントでは「食の館」！

4

3

リニューアル！ 病院案内パンフレット

広報委員　保倉 満（総務課主任）

受付にございます。⇑

このたび、病院総合パンフレットをリニューアルいたしました。企画・編集を担当したのは、当委員会のパンフレット班のメンバー（宮澤・五十嵐・井守・恩田）です。

リニューアル版のコンセプトは、患者様やそのご家族、就職希望者の方に対して、病院の特徴・機能を、容易に理解していただくことです。そのため、病院内の平面図と写真をリンクさせ、これにできるだけ短く平易な表現の文章をつけました。

デザインについては、せきゆうこ設計室の関由有子さんにお願いしました。ブルーとイエローを基調とした配色で、明るくソフトな感じに仕上がっています。また、写真や図、マークが効果的に配置されており、非常に見やすくなっています。現在、外来・受付窓口に置いてありますが、近々病院ホームページで閲覧・ダウンロードできるようにする予定です。

委員会
活動報告

セクション
紹介

年報委員会

当委員会は平成12年11月に院内15委員会の一つとして立ち上がりました。1年の出来事や事業実績がまとめられてある年報を作成することが年報委員会の仕事です。

その当時といえば、平成7年11月に川室道隆前院長から川室優現院長に交代され、高田西城会が時代・地域に応じた新しい事業の展開、医療福祉サービスの提供を始めている時期でありました。訪問看護ステーション・生活訓練施設・老人デイケア・ショートステイなどの開始、病床変更、リハビリテーションの充実、外来部門の充実、看護基準の変更など、以降現在まで変化を続けています。そしてそれに伴い、各現場は業務の変化充実を常に求められ対応してきています。

そのような多様な動きと実績をまとめておき、これから先、何年か後に振り返ってみた時にも、その年度の状況がわかる年報作りをしていく必要があると思います。年報は、面白いというものではありませんが、法人の歴史、事業に触れてみてください。

年報委員長　畾（もたい）真穂（相談課長 PSW）

糸魚川診療所

高田西城病院の皆様、いつも入院依頼を快く受け入れていただき、ありがとうございます。当診療所を訪れる患者さんの年齢は10代前半から90代後半の方までと幅広く、疾患も多岐にわたります。現在外来数は 1診療日あたり 60～70人で、90人以上となる日もあります。レセプト件数で月約800件、延べ人数は1,300件前後で、移転前と比べそれぞれ倍増しており、必然的に入院を要する人も多くなります。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

診療の他に膨大な文書類の作成にも多くの時間と労力を要します。ケースワーキング、リワーク事業、専門外来等々、課題は山積していますが、スタッフはひとりでも欠けると立ち行かない最小限ですので、新規のことには着手出来ないのが現状です。

糸魚川は慌ただしいところですが、夕方には患者さんとスタッフの旧友同士のような会話が聞こえたり、手ずから作られた野菜やお花、手工芸作品やお惣菜などをいただいたりすることもあり、家庭的な雰囲気があります。このような心和むひとときに救われつつ、一日一日を過ごしています。

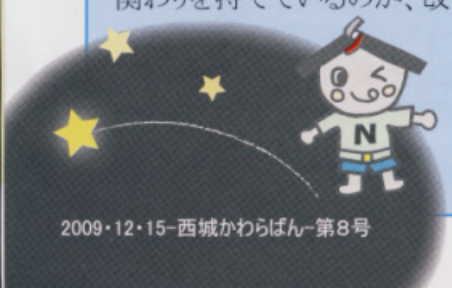
糸魚川診療所スタッフの皆さんです。（敬称略）
後列左から、大嶽(CP)、事務の北村、磯貝、伊藤(Ns)、
前列は、中村(Ns)、藤巻(Dr)、鹿島(PSW)、福田(ボランティア)

糸魚川診療所 所長　藤巻　誠

編集後記

E-mail　info@nishishiro-hp.or.jp

編集後記を書いているこの時期は、ちょうどオリオン座流星群が最もよく観測できる期間のようです。そして、この「西城かわらばん第8号」が発行になるあたりには、ふたご座流星群が観測のピークをむかえているとのこと。オリオン座流星群を見るには、深夜0時から明け方にかけての時間帯が適しているそうですが、ふたご座流星群は、宵の頃からそれらを見ることができるといわれているので、気楽に楽しむことができるのではないでしょうか。『ぼんやり空を眺めて星が流れるのを待つ』 流星群の話題は、こんな、心にゆとりのある時間を過ごす大切さを私に思い出させ、またそれは、私が心の病気の治療に関わるものとして、患者様が「心のゆとり」を取り戻せるよう、適切な関わりを持てているのか、改めて自分を見つめ直す機会も与えてくれました。

この紙面の記事が、流星群の話題までとは言いませんが、少しでも読者の皆さんの心にプラスの影響を与えられるよう、今後も編集委員一同努力していきたいと思います。最後になりましたが皆さん良いお年をお迎えください！

広報委員　山口（薬剤師）